

英語部会 研究の構想（案）

令和2年度～

I 研究主題

コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか
- 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して -

II 主題設定の趣旨

英語は世界で広くコミュニケーションの手段として用いられている。グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。

令和3年度全面実施の新学習指導要領では、取り扱う言語材料（語彙や文法事項）がより豊かになっており、言語活動に広がりや深まりをもたせることが可能となっている。また、英語科の目標に加え「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の4技能5領域別の目標も設定された。これまでも、各校においては、言語活動を充実させ、言語材料の定着を図るとともにコミュニケーション能力の一層の育成を目指す指導を続けてきたところだが、さらに、生徒の興味・関心や発達の段階に応じた適切なテーマを取り上げ、4技能5領域を総合的に育成する言語活動の充実に留意したい。コミュニケーション能力を育成するためには、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することが大切である。今後も、中学校3年間で付けたい力を明確にし、生徒の学習段階や習熟の程度を考慮しながら既習の内容を繰り返し指導して言語材料の定着を図っていききたい。そして、基礎的・基本的な内容についての指導を十分に行うとともに、知識・技能を活用し、実際に英語を使用して積極的にコミュニケーションを図る言語活動の工夫について研究を進めたい。

令和2年度の小学校新学習指導要領全面実施を受けて、小・中学校、さらに高等学校との連携を推進し接続を意識した指導計画を作成したり、各学年の4技能5領域の到達目標を具体的に設定したりするなど指導計画の在り方や指導と評価の工夫、学力調査等における分析結果の活用等についても、引き続き研究を進めたい。

小学校外国語活動で育まれたコミュニケーション能力の素地の上に、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識を活用し、自らの体験や考え等と結び付けながら、「話すこと」や「書くこと」で発信できる技能が身に付くよう指導するなど、領域統合型の言語活動を授業に取り入れ、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培いたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

- ・外国語によるコミュニケーション能力を養うために、3年間の見通しをもった系統的な指導計画の下、生徒が意欲的に取り組める言語活動の在り方、指導に生かす評価の工夫等について研究と実践を行う。
- ・研究主題と研究内容（P）、授業研究と研究発表（D）、学力調査等（S）のトライアングルの関係を意識し、外国語を用いてコミュニケーションを図る活動の質の向上を目指す。

2 研究の内容

(1) 指導計画の工夫

小・中・高の学びの連続性を意識し、小学校での学習内容を踏まえた中学校各学年の4技能5領域の到達目標を定めて、指導計画を作成する。特に、小学校との円滑な接続に一層留意する。

(2) 言語活動の工夫

コミュニケーションを行う目的、場面、状況等を意識した言語活動を設定し、生徒が日常的・社会的な話題について自分の体験や考え等を互いに伝え合うことができるように指導する。

(3) 指導方法の工夫

生徒の学習意欲を喚起するような指導方法を工夫する。

(4) 指導と評価の一体化

学力調査におけるS-P表等を利用した分析結果を指導の改善に生かす。また、目標に準拠した適切な評価方法を工夫する。

英語部会 令和2年度研究計画（案）

I 研究主題

コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。
－聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して－

II 主題について

現行学習指導要領において、小学校外国語活動では、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標とし、中学校外国語では、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標としている。4技能を総合的に育成するための言語活動に重点を置きながら、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図るとともに、実際の言語の使用場面でのメッセージの授受を通じた思考力・判断力・表現力等の育成について、指導と評価の方法や指導過程の研究を進めてきた。各地区の研究大会等の成果により、身近な題材の活用、単元で身に付けさせたい力を踏まえた学習課題の設定と指導過程や学習形態の工夫、目的に応じたICT機器の効果的な活用等が、生徒の学習意欲を高め、4技能を総合的に育成するために効果的であることが解明された。令和元年度（平成31年度）の学力調査等の結果から経年の変化を把握・分析すると、各学年ともに語彙選択や適語補充等の正答率が上昇しており、基本的な言語事項が身に付いていることがうかがえる。一方、文脈や全体の概要を捉える力に課題が見られる。

以上のことを踏まえ、今年度も、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーション能力を養うための指導の工夫について研究を深める。3年間で身に付けさせたい力、すなわち「英語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、コミュニケーションの目的、場面、状況等を設定した活動を行う。その中で、日常的な話題や社会的な話題について、学んだ知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できるような技能を養いたい。その際、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を積極的に取り入れていきたい。また、小学校における指導の内容や実態を把握し、目標や学習内容の系統性、指導方法の継続性等を考慮するなど、小・中・高の学びの連続性を意識して、年間指導計画等の作成に努めたい。教師自らが学び続け、自身の英語力や授業力を向上させるとともに、新学習指導要領に謳われている、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことを意識しながら、主題の解明に取り組んでいきたい。

III 研究内容とその視点

1 指導計画の工夫

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した5領域別の学習到達目標を活用し、実際のコミュニケーション場面を意識した言語活動を、生徒の実態に合わせて計画的・継続的に行う。その際、学習到達目標を具体化した単元の目標を設定し、達成状況を把握しながら、指導と評価の一体化へとつなげる。
- (2) 小・中・高の学びの連続性を意識する。小学校外国語活動で養った素地をもとに、高等学校の学習内容の高度化に向けた基礎を培う観点から、さらにコミュニケーション能力を養うための指導計画を立てる。
- (3) 特に、小学校との円滑な接続に留意するとともに、「音声と文字」の関係に触れた学習を指導計画に位置付ける。なお、小学校で扱った学習内容を中学校の授業で意識的に繰り返し使用することで、定着を図るよう考慮する。

2 言語活動の工夫

- (1) 生徒が既習の言語材料を言語活動の中で繰り返し学習し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得できるように留意する。
- (2) 实际的で必然性のある具体的な言語の使用場面を設定し、コミュニケーションを行う目的、状況等に応じて、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付ける。
- (3) 実際の場面で思考・判断し、即興で伝え合う力を付けるような言語活動を工夫する。
- (4) 互いの考えや気持ちを英語で伝え合おうとする意欲につながるよう、家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事等の日常的な話題や社会的な話題と関連付けた言語活動を取り入れる。
- (5) 「聞くこと」「読むこと」を通して得た内容について、生徒が自らの体験や考え等と結び付けながら思考・判断し、「話すこと」「書くこと」を通して意見や感想等を発信できるようにする。

3 指導方法の工夫

- (1) 英語による言語活動を行うことを授業の中心とし、生徒が授業の中で英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実させる。その際に、ペアワークやグループワークといった学習形態を取り入れ、生徒が協働的に学習できるようにする。
- (2) 小学校で扱った簡単な語句や基本的な表現等の学習内容を繰り返し指導し、定着を図るようにする。また、語彙の充実については、活用頻度や活用のしやすさに配慮し、受容的な使用の中で次第に発信的使用へと発展していくように言語活動と関連付けて指導する。
- (3) 各単元において、コミュニケーションを行う目的、場面、状況等を明確に設定し、どのような言語活動を行うかを示すことで、身に付けさせたい力を明らかにし、生徒が学習の見通しをもって、主体的に取り組めるように、指導過程を工夫する。
- (4) 生徒の英語学習への意欲を高め、理解が深まるよう、板書、課題提示、発問、モデルの演示、終末の振り返り等を工夫したり、ICT機器を効果的に活用したりする。
- (5) 英語の基本的な音声や英語特有の文構造に習熟できるよう、日本語にない音や強弱を意識した発音練習、音の連結やイントネーション、区切りを明確にした音読練習等を工夫する。
- (6) ネイティブ・スピーカー等を効果的に活用し、広い視野から生徒の国際理解を深める。
- (7) 自律的な学習者の育成を目指し、辞書（語彙）指導、音読指導、多読指導、ノート指導、家庭学習の指導を計画的に行う。

4 指導と評価の一体化

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した学習到達目標に基づき、各単元の目標及び評価規準を設定する。また、学習の過程における形成的な評価を行い、指導方法の改善に生かす。
- (2) 授業の構想においてねらいを明確にし、学習課題等を具体的に示すとともに、終末における学習成果の確認を重視した授業を展開する。
- (3) ペーパーテストによる評価に加え、面接、スピーチ等のパフォーマンステストを取り入れるなど、4技能5領域を総合的に評価するための方法を工夫する。また、生徒が目標をもって主体的に学習に取り組めるよう、評価方法や評価規準、評価基準を事前に示す。
- (4) S-P表等を活用して学力調査等の結果を分析し、生徒のつまづきや全体の傾向を把握して、指導の改善に生かす。

IV 研究方法

- 1 研究主題の趣旨に沿って、各学校・郡市・地区で、研究授業や研究発表を中心に研究を進める。
- 2 部会や専門研修会等で、研究に関する情報交換に努め、相互に啓発し合い指導の改善に生かす。
- 3 学力調査等の分析結果を活用し、指導と評価の一体化を図り、指導計画や指導方法を見直す。
- 4 研究のまとめを作成し、共有した研究の成果と課題を踏まえて次年度へと継続研究していく。

